



The Spirit of Eternity Sword-2

***Original Story ザウス
Novelization 三田村半月
Original Illustration 人丸***



プロローグ

5

第1章 天空の稻妻

13

第2章 マナ障壁

47

第3章 〈因果〉と〈空虚〉

81

第4章 這い寄る影

117

第5章 天才と凡才

151

第6章 気高き者

183

エピローグ

213

プロローグ

少年は、夜の砂漠を歩いていた。

砂丘がうねる蒼い世界だ。

頭上には満月が昇り、地上に濃い陰影を落としている。空気が澄んでいて、空が近く感じられた。星々が明るく瞬き、口笛でも吹きたくなるほど幻想的だったが――とつくなじみ飽きてもいた。

どこまで歩いても、風景に変化はなく、単調そのものだったからだ。

背中に少女の重みを感じ、一步一步、足跡を刻みながら移動した。
静かだった。

気が狂いそうなほど――。

砂で足音は消されている。

風もない。

「……なんの因果で、こんな目に遭わなくちゃならないんだか」

少年は、誰にともなくぼやいた。

体力を温存するためには、黙々と距離を稼いだほうがいいと理性ではわかつていたが、先天的に軽口が好きな性分だから、つい沈黙に耐えきれず、思わず声を発してしまったのだ。

ひび割れた唇を舐めた。

砂と、わずかな塩氣があつた。

バケツいっぱいの水が飲みたかつた。

「まつたく……ありえねえ……」

気がついたら、砂漠のど真ん中にいた。

冗談のような話だつた。

彼らは、平凡な少年と少女だつた——はずだ。

それなのに、神社の境内で親友のケンカを止めさせようとして、いきなり眩まばゆい金色の光に飲み込まれたかと思うと、意識が薄れ、気がついたときには一人とも熱砂に焼かれて寝転がっていたのだ。

頬をなでる熱風で目が覚めた。陽が昇つたばかりだつたらしく、まだまだ気温は上昇しそうだつた。腹の減り加減や、喉の渴き具合から考えて、それほど長いあいだ気を失つていたとは思えなかつた。

少女は混乱しきつていたが、かろうじて冷静を保つた少年は、動かないほうがいいと説得した。シャツを頭からかぶり、即席の日除けにした。肌を直接陽にさらさないから、長袖の冬用ブレザーは、かえつて好都合だつた。

太陽が沈むまでは砂丘の陰で休み、夜になつてから移動することにした。

——これじやあ、本気で即身仏になつちまうぜ。

とにかく水の補給ができない。無駄な発汗は死に直結してしまう。おそらく、日陰でも攝氏で五〇度はあつただろう。半ば砂に埋もれて寝ているだけでも、容赦なく水分を奪われていたはずだ。

昨年、興味本位で読んだサバイバル教本には、熱砂漠で三〇キロを踏破するためには、夜間移動のみでも四リットル弱の水が必要だと書いてあつた。

うろ覚えの知識を総動員して、なんとか地中から水を得ようとしたが、すべて失敗に終わっていた。根っこをかじろうにも、植物が見あたらない。動くものは、サソリ一匹すらいなかつた。

完全な不毛地帯だつたのだ。

——体力には自信があつたんだがなあ……。

そぞろ歩きしながら、呼吸法で体調と精神を整えた。

そもそも、人体は砂漠での生存に適していない。いくら鍛えても、大自然に勝てるはずがなかつた。靈長類れいりょうるいだ、食物連鎖の頂点だと威張つてはみても、しょせんは陸地の一部しか征服できないのだ。

「……うう」

少女が、背中で苦しそうにうめいた。

目眩と頭痛を訴えて、とうとう少女が歩けなくなつたのは、数時間前のことだつた。眉間にシワを寄せ、必死に歯を食いしばつてゐる。

「おい、しつかりしろよ？」

声をかけてみたが、反応はなかつた。

すでに意識が朦朧としているのだ。

背中越しに、はやい心臓の鼓動と、胸の弾力が伝わつてゐる。ブラはつけていない。少しでも風通しをよくして、余計な汗をかかないようにするために外させたのだ。顔が赤く火照つてゐるのに、すっかり発汗は止まつていた。

あきらかに熱射病(ヒートストローク)だつた。

「こんなところでくたばるなんて、おまえらしくないぞ？ な？」

それでも、よく保つたほうだつた。

いくら気が強くとも、普通の女の子だ。極限状態では、女のほうがしぶといと聞いたことがあるが、なんの装備もなく熱砂漠に放り込まれれば、誰だつて順応する前に錯乱してしまうだらう。

二晩も耐えられたことが奇跡のようなものだつた。

「ん……悠う」

少女の呟きを聞いて、少年は、思わず夜空を仰いだ。

——このシチュエーションで、そのセリフ……ありえねえ。

氣力が萎えかけたが、なんとか根性で歩きつづけた。

どこへむかっているのか、少年にも不明だつた。空には飛行機どころか、鳥さえも見かけない。本当は、救出のあてがなくとも、動かないことが唯一の正解だつたのだ。無謀だとはわかつていたが、動かずにはいられない理由があつた。夜空を見ても、知つてゐる星座が一つもない。緯度と経度から判断しようにも、どの国にいるのか、現在位置がわからなかつた。

不安材料を増やしたくなかったから、少女には教えていないが、少年は恐るべき眞實に気づいていたのだ。

——本気で、ありえねえ……。

太陽と月の位置関係も無茶苦茶だつたし、少年の知識にある世界地図には、こんなところに、これほど広大な砂漠はなかつた。
つまり……ここは、地球ではない、ということになる。

現実が足元から崩れていくような感覚があつたが、そこは精神修行のたまもので、混乱する意識を部分的に切り離し、今は生き延びることに全能力を傾けることで、心の均衡を取り戻していた。

——とにかく、こいつだけでも助けなくちゃな。いざとなれば、俺の血をすすらせてで

も……絶対に生かしてやる。

だが、少年の肉体も、確実に限界へと近づいていた。

せいぜい、あと一日保つかどうか——。

「どう考えても、俺の役目じゃないんだがな……そうだろ?」

この場にいない親友の名を、少年は呟いてみた。

——俺は、二番目でいいって思つてたんだぜ?

静かで、蒼い世界だった。

明るい月が、砂丘を照らしている。

幻覚も、幻聴も、まだ強靭^(きょうじん)すぎる理性が許してくれないが、だんだん時間の感覚が麻痺^(まひ)し、ひたすら機械のように足を動かしていた。

「まあ……なんとかなるさあ」

少年の口元に、しぶとい笑みが浮かんでいた。

最後まで楽天的な自分が、なんとなく可笑^(おか)しかつたのだ。

こんなときなのに、背中に乗つている少女と二人きりになれたことが嬉しかつた。なんと言つても、月の輝く砂漠だ。なかなか口マンチックな道行きだった。あとはラクダでも砂丘を横切れば最高だつた。

「……ん?」

少年は、ヤニだらけの眼を瞬かせた。

ラクダはいなかつたが、砂丘の上を横切つている集団を発見したのだ。
「うおおおいつ」

乾いて張りつきそうな喉で叫んでいた。

彼らのような迷子が、そういうとは思えない。
助かったのだ。

オアシスが近いのかもしれない。人がいるということは、水もあるということだ。きっと食料も分けてもらえるだろう。薬だってあるはずだつた。

「気づけ！ こんちくしよう！」

駆け出したかつたが、少女を背負つたまま走る力は残つていなかつた。
全力で手をふり、叫んでいた。

「うおおおおおおおいつ！」

相手は気づいたようだつた。

こつちにむかつてくる。

安堵で一気に膝が砕けた。

「……え？」

少女を背中に乗せたまま、砂の上にうつ伏せで倒れ、しだいに意識が遠のいていくのを

感じながら、少年は我が目を疑つていた。

——ヤバいな……いよいよ涅槃か？

救出にやつてきたのが、文字通り天使の姿に見えたからだ。いや、妖精だろうか——。

まるで宙でも飛んでいるようなはやさだつた。

翼を羽ばたかせ——巨大な剣を手にした——。

それは、異形の少女たちであつた。

「まあ、天使でも、悪魔でも……いいか」

苦笑して、眼を閉じた。

この物わかりのよさは、ほとんど病気だな——と少年は自嘲した。